

2016 年度秋季大会

2016 年 10 月 22 日 (土)・23 日 (日)

会 場：東北大学 川内南キャンパス 文科系総合講義棟
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

第 1 日 10 月 22 日 (土)

受 付 11:30 ~ 16:00 文科系総合講義棟 1 階ホール

開会式 13:00 ~ 13:15 203

司会 東北大学 坂 巻 康 司
開会の辞 東北大学 阿 部 宏
開催校代表挨拶 東北大学 佐 藤 弘 夫
会長挨拶 大手前大学 柏 木 隆 雄

研究発表会 201~204、211

第 1 部 13:30 ~ 14:30

第 2 部 14:45 ~ 16:15

特別講演 16:30 ~ 17:45 203

Michel JARRETY (Université Paris-Sorbonne)

« Paul Valéry et son temps »

司会 東北大学 今 井 勉

懇親会 18:00 ~ 20:00

会場：川内北キャンパス内 川内の杜ダイニング

*研究会 10月22日 (土) 10:00 ~ 12:00

18世紀フランス研究会 212

自然主義文学研究会 211

大会本部：東北大学大学院文学研究科フランス語学フランス
文学研究室

お問い合わせ先：Tel：022-795-5975 (今井研究室)
e-mail：tsutomu@m.tohoku.ac.jp

当日連絡先：Tel：022-795-5973 (仏文研究室)

一般控室：1階コモンスペース

賛助会員展示会場：2階ホール

第 2 日 10 月 23 日 (日)

受 付 9:30 ~ 15:00 文科系総合講義棟 1 階 ホール

ワークショップ

第 1 部 10:00 ~ 12:00 201、202、204

第 2 部 13:00 ~ 15:00 201、202、204

総 会 15:15 ~ 16:45 203

議長 東北学院大学 山 崎 冬 太

閉会式 16:45 ~ 16:55 203

会長挨拶 大手前大学 柏 木 隆 雄

閉会の辞 東北大学 寺 本 成 彦

■ 大会費：1,000 円

■ 懇親会費：別紙「大会費等の振込について」を参照。
いずれも同封の振込用紙にて、10月7日(金)までにお
振込みください。

■ 大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局
(sjllf@jade.dti.ne.jp) までご請求ください。

■ 委員会・役員会については、学会事務局よりご連絡い
たします。

■ 昼食：10月22日(土)は生協が営業しておりますが、
10月23日(日)は会場周辺に飲食店がないため、お弁
当をご用意いたします。受け渡しは一般控室(1階コモ
ンスペース)です。

■ 会場で託児サービスを希望する方は、別紙の案内をご
覧の上、メールにて9月23日(金)までにお申し込みく
ださい(宛先：tsutomu@m.tohoku.ac.jp)

■ 東北大学構内は全面禁煙です。周辺道路上での喫煙も
ご遠慮ください。

研究発表会 プログラム 10月22日(土)

	第1部 (13:30 ~ 14:30)	第2部 (14:45 ~ 16:15)
	語学	中世・16世紀
211	<p>司会：阿部 宏 (東北大学)</p> <p>1. 借用語と語彙クリエーション — インターネット世代の日仏語間「借用語」をめぐって 宮川 宗之 (筑波大学博士課程)</p> <p>2. モダリティ表現における語用論的機能 — devoir, pouvoir, si の例を中心に 岸本 聖子 (立命館大学嘱託講師)</p>	<p>司会：黒岩 卓 (東北大学)</p> <p>1. 中世抒情詩における獅子のモチーフ — ペラン・ダンジクール^{ペラン・ダンジクール}の詩を例に 佐藤 吾郎 (ヴェスイエール・ジョルジュ) (パリ第4大学博士課程)</p> <p>2. ラムス論理学の冒険 — ラテン語『ディアレクティカ』(1543) からフランス語『ディアレクティック』(1555) へ 小池 美穂 (日本学術振興会特別研究員)</p> <p>3. モンテーニュとセネカ『倫理書簡集』 — 羅仏間借用における修辞技法の振る舞い 榎原 知樹 (東京大学修士課程)</p>
	17世紀・18世紀	19世紀B
201	<p>司会：永盛 克也 (京都大学)</p> <p>1. ジャン・ロトルー『コスロエス』における悲劇的登場人物について 畠山 香奈 (東京大学研究員)</p> <p>司会：熊本 哲也 (岩手県立大学)</p> <p>2. 自伝文学における語りの視点 — レチフ・ド・ラ・ブルトヌ『ムッシュー・ニコラ』を中心に 石田 雄樹 (日本学術振興会特別研究員)</p>	<p>司会：倉方 健作 (九州大学)</p> <p>1. 共和主義詩人としてのヴェルレーヌ — 初期作品を中心に 山本 健二 (龍谷大学非常勤講師)</p> <p>2. フランス反ユダヤ主義とメディアの黄金時代 — 反ユダヤ主義日刊紙『リーブル・パロール』を中心として 鈴木 重周 (日本学術振興会特別研究員)</p>
	19世紀A	20世紀C
202	<p>司会：小倉 孝誠 (慶應義塾大学)</p> <p>1. シャトーブリアンの『イタリア紀行』に描かれたイタリア — 現実を指向する旅行記記述をめぐって 野澤 督 (慶應義塾大学非常勤講師)</p> <p>2. グザヴィエ・フォルヌレとロマン主義 辻村 永樹 (早稲田大学非常勤講師)</p>	<p>司会：竹内 修一 (北海道大学)</p> <p>1. ブリス・パランを読むカミュ — 「反抗」概念における超越性 渡辺 惟央 (東京大学博士課程)</p> <p>2. マルグリット・ユルスナールの歴史観 — 「歴史と向き合う作家」(1954) を中心に 森 真太郎 (明治大学助教)</p>
	20世紀A	20世紀D
203	<p>司会：加藤 靖恵 (名古屋大学)</p> <p>1. アンドレ・ジイドの作品における「身体」の権力 森 香織 (慶應義塾大学博士課程)</p> <p>2. ブルーストの『失われた時を求めて』に見るプラトン主義・新プラトン主義 菊池 博子 (お茶の水女子大学博士課程満期退学)</p>	<p>司会：高橋 信良 (千葉大学)</p> <p>1. アントナン・アルトーにおける「他者性」について — 「狂気語り」は詩作品たりえるか 大坪 裕幸 (立教大学非常勤講師)</p> <p>2. 訪れる私、迎える私 — ベケットの『モロイ』における不安な訪問 清水 さやか (東京大学博士課程)</p> <p>3. ジャン・ジュネ『恋する虜』におけるハムザと彼の母のカップルの形象と作品の構造の関係 田村 哲也 (東京大学博士課程)</p>
	20世紀B	20世紀E
204	<p>司会：有田 英也 (成城大学)</p> <p>1. 外交官僚エリートと黒人 — ポール・モラン『黒い魔術』(1928)における保守的文化相対主義 吉澤 英樹 (成城大学非常勤講師)</p> <p>2. 近代兵器と道 — マルロー『王道』に見る西欧の肖像 井上 俊博 (大阪大学非常勤講師)</p>	<p>司会：久保 昭博 (関西学院大学)</p> <p>1. 痕跡としての音 — ロブ=グリエ『去年、マリエンバードで』を題材に 木村 仁志 (筑波大学博士課程)</p> <p>2. パトリック・モディアノ作品における記憶とフィクション 坂東 真理子 (リモージュ大学博士課程修了)</p>

特別講演 10月22日(土) 16:30 ~ 17:45

文科系総合講義棟203

Paul Valéry et son temps

Michel JARRETY (Université Paris-Sorbonne)

La question est naturellement bien trop vaste pour être traitée de manière exhaustive puisque Valéry a porté son regard tour à tour sur la littérature, les arts, les sciences, la politique ou bien encore l'état de la société de son époque. Je m'en tiendrai donc à la littérature, et pour montrer tout particulièrement comment le jeune Valéry symboliste se sent résolument moderne, après quoi s'ouvre une période de désenchantement. Abolissant les exigences de rigueur de la fin du XIX^e siècle, la littérature des décennies suivantes lui paraît trop souvent céder à la facilité et donner lieu à des œuvres que le lecteur, au lieu de se les approprier lentement et difficilement, parce qu'il s'agissait, justement, d'œuvres difficiles, parcourt comme pour se divertir. Alors que se multiplient ainsi les réserves à l'égard du moderne, un éloge du classique se dessine au contraire qui, sous bien des aspects, se confond avec le symbolisme défunt : un certain art d'écrire est célébré, et symétriquement un certain art de lire, mais qui désormais sont perdus. Après avoir été pleinement de son temps, le Valéry de la maturité se sent ainsi décalé par rapport à lui, et aussi par rapport à une société trop futile où il n'est plus possible de connaître le loisir fécond où chacun pouvait véritablement cultiver son esprit et par conséquent le renforcer.

ワークショップ第1部 10月23日(日) 10:00 ~ 12:00

ワークショップ1 文科系総合講義棟201

Dire le bonheur : une gageure littéraire ?**Président :** Yann MEVEL (Université du Tohoku)**Intervenants :** Guilhem ARMAND (Université de la Réunion), Yuki ISHIDA (chercheur attaché à la JSPS), Mirei SEKI (Université d'Aichi)

Cette table ronde constitue la première phase d'un projet de recherche mené en collaboration avec un spécialiste de la littérature française du XVIII^e siècle, Guilhem Armand, maître de conférences à l'Université de La Réunion. On pourrait, à l'heure actuelle, penser que le bonheur relève essentiellement d'une littérature populaire, à faible valeur artistique. Cette table ronde permettra de nuancer ce point de vue. Ce n'est pas uniquement de représentations ou même d'aspirations qu'il sera question, mais des pouvoirs de l'écriture et de la littérature. La communication de Guilhem Armand, intitulée *Le bonheur selon Diderot : variations de l'idéal matérialiste*, visera à cerner les variations et les nuances d'une conception du bonheur qui, dans ses contradictions et revirements, reflète bien les hésitations du siècle des Lumières. La communication de Yuki Ishida, doctorant et chercheur attaché à la JSPS, *Le bonheur par la création littéraire : les liens entre le bonheur et l'imaginaire chez Rétif de la Bretonne*, tentera d'éclaircir la tentative de Rétif de la Bretonne de faire de l'écriture le moyen d'un bonheur individuel et idéal. La communication de Mirei Seki, maître de conférences à l'Université d'Aichi, portera sur *La représentation du bonheur dans les romans des écrivains femmes au XIX^e siècle*, et s'intéressera notamment à des œuvres de Delphine de Girardin et de George Sand. Elle évoquera des écrivaines à la recherche d'un bonheur tout à la fois individuel et collectif. Enfin, la communication de Yann Mével, *Avec et après Beckett : le bonheur malgré tout ?*, rendra compte des traces ou signes de l'espoir, des possibles épiphanies dans l'œuvre de Beckett, avant de se pencher sur des œuvres d'écrivains qui se reconnaissent en Beckett.

ワークショップ2 文科系総合講義棟202

ラファディオ・ハーンとフランス**コーディネーター・パネリスト :** 中島淑恵 (富山大学)**パネリスト :** 濱田明 (熊本大学)、廣松勲 (法政大学)

ラファディオ・ハーンの旧蔵書の大半を占める洋書のうち約3割はフランス語の書物である。そこからは、ハーンがロマン派を中心とするフランス文学に強い関心を抱いていたことや、もっぱらフランス語の書物から民俗学や歴史学の知識を得ていたことが見て取れる。ニューオリンズ移住以降のハーンはとりわけ、ゲーティエやボードレールの作品に触発された翻訳やエッセイを数多く発表している。また、ハーンによるマルティニークの民話の聞き書きやエッセイには、このようにして培われたフランス文学や民俗学の知識がいかに発揮されている。そして来日後のハーンは、様々なフランスの文学作品を東京帝国大学等の講義の中で解説している。この中にはハーンによる紹介が本邦初というものも数多くあり、我が国におけるフランス文学の受容にハーンが果たした役割についても、検討する余地が未だあるだろう。

本ワークショップでは、まず中島がハーンとフランスとの関わりについて概略を述べ、旧蔵書のフランス語本の構成を紹介し、仏文研究者がハーンについて行ない得るアプローチを提案する。その上で濱田が、東京帝国大学の講義録をもとに、ハーンが講義の中で、フランスの作家や作品をどのように解説しているかを紹介する。廣松は、マルティニーク時代のハーンについて述べ、その著作が彼の地で後年もたらした影響について報告を行う。さらに中島が、ニューオリンズ時代のハーンにおけるボードレールの影響について紹介を行う。これらを踏まえて、ハーンにおけるフランスの文学や文化の影響について、あるいはハーンが後年フランス文化圏にもたらした影響について、情報共有し意見交換する場を提供したい。

ワークショップ3 文科系総合講義棟204

生誕111年 J.-P. サルトル再読 — 実存主義を遠く離れて**コーディネーター・パネリスト :** 翠川博之 (東北大学非常勤講師)**パネリスト :** 生方淳子 (国士舘大学)、澤田直 (立教大学)

かつて日本は世界のどの国よりも熱狂的にサルトルを受容しながら、その後、手のひらを返すようにサルトルを読むことを止めてしまった。残念なことに、サルトルといえば『嘔吐』と『存在と無』の実存主義者、『弁証法的理性批判』を書いたマルクス主義的知識人といった紋切り型がいまだに幅を利かせている。他方、フランスを中心とする欧米では、膨大な遺稿類の発掘や検討を通して、彼の広汎な仕事に対する学際的研究が現在も活発に進められている。生誕111年。いま、サルトルのテキストは読者になにを語りかけるのか。本ワークショップは、最先端の研究を意識しつつ、旧来のサルトル像を刷新するために企画したものである。邦訳のない作品や新資料を参照しながら、研究領域を異にする3名のパネリストがそれぞれの観点から新たなサルトル像を描き出す。

澤田は、芸術家と作品を歴史の中で結節しようとするサルトルのアプローチに、作者と作品を截然と分かち作品至上主義的な読解を越える新たな芸術論の可能性を見いだすべく、知られざるティントレット論を含むイタリア関連テキストを読解する。翠川は演劇テキストに注目。未訳の戯曲第一作「バリオナ」と直後に書かれた『蠅』を一对の作品と捉えることで、『存在と無』の翻案とみなされてきた『蠅』の意味を根本から問い直し、その制作過程からサルトルの心性、思想の裏面をあぶり出す。生方は1964-5年に執筆された遺稿「コーネル大学講演予定原稿」を取り上げ、いったんは倫理学を放棄したサルトルが倫理の規範性とモラル・ジレンマについてどう考察を進めていたのか、コールバーグの道徳性発達理論と比較しながら検証する。

ワークショップ 第2部 10月23日(日) 13:00 ~ 15:00

ワークショップ4 文科系総合講義棟201

ソシュール『一般言語学講義』の1世紀 — 構造主義、時枝論争、新手稿

コーディネーター・パネリスト：阿部宏（東北大学）

パネリスト：松澤和宏（名古屋大学）、金澤忠信（香川大学）、松中完二（久留米工業大学）

本年は、『一般言語学講義（以下、『講義』）』（1916）刊行100周年にあたる。この著作は20世紀言語学のバイブルとしての位置づけにとどまらず、人文社会諸科学の構造主義の思潮を生み出し、他方では『講義』のテキストそのものを再検討するソシュール文献学を誕生させ、今日に至っている。また日本では、言語過程説の立場からのソシュール批判、いわゆる時枝論争が展開されることとなった。

本ワークショップは、『講義』が巻き起こしたこれら国内外の1世紀の動向を批判的に踏まえた上で、以下の諸点を中心に議論し、新たなソシュール研究の方向性を模索するものである。

・「ソシュールの手稿」には一般言語学に関するものだけでなく、歴史比較言語学、伝説・神話研究、アナグラム研究、書簡、日記・忘備録、政治的言説なども含まれている。これらは少しずつではあるが公表されており、「構造主義の先駆者」にとどまらないソシュール解釈の可能性を示唆するものである。

・ソシュール学説における最大の謎と矛盾点は、「言語の科学に langue を設定」し、「言語が実存体」であり、「言語記号には差異しかない」という主張である。これらの主張こそが、時枝誠記が己の学説で全面的に異を唱えた点であった。しかし、この時枝論争を今日的観点から検証してみれば、新たな側面が見えてくるのではなかろうか。

・ソシュールの弟子たちによる編著書『講義』の刊行によって流布し定着した観のある通説（ドクサ）の一つが、記号内の二つの面（シニフィエとシニフィアン）の関係は、同じ体系内の記号間相互の差別的関係の二次的な結果に過ぎない、という解釈である。丸山の説いた「ソシュールの思想」の核心でもあるこの通説を、手稿や聴講ノートに基づいて再検討する。

ワークショップ5 文科系総合講義棟202

レチフ・ド・ラ・ブルトンスを読む — 記憶・系譜・道徳

コーディネーター・パネリスト：藤田尚志（九州産業大学）

パネリスト：森本淳生（京都大学人文科学研究所）、辻川慶子（白百合女子大学）

これまで18世紀の専門家にさえ扱われることの少なかった文学者レチフ・ド・ラ・ブルトンス。この分類不能な未聞の作家に対して登壇者三人は、門外漢ながらそれぞれの関心から接近し、新たな可能性を引き出すことを試みる。

森本は、『ムッシュー・ニコラ』中の「サラの物語」に、文学が記憶・回想と特権的連関をもつに至る、その端緒の一つを見出す。自己の人生を絶えず反芻し、その様々な変奏を作品化するレチフにおいて、統一的な主体は記憶の多様な層へと分散している。人生の絶えざる書き換えとその再創造は、現代のオートフィクションの論点にほかならない。

辻川は、レチフ、ネルヴァル、シューに共通する「捏造された家系図」というモチーフを出発点とし、1848年前後のレチフ・リバイバルの意義を考える。三者いずれにおいても、現在の起源を辿る試みの中で、正統性を欠いた遺産継承の物語が語られる。過去の書き換え、系譜の詐称という遺産創生の物語が新たな集合性の夢を生み出すさまを検討する。

藤田は、近代的結婚の可能性と限界を同時に描写したルソーとは真逆の位置を占めるのがレチフであるという見取り図のもと、具体的な作品の幾つかをとりあげる。レチフによる道徳性の称揚と家族壊乱的論理の交差を、単純に裏／表と捉えるのではなく、道徳性そのものが持つ不道徳性（不実な誠実さ／誠実な不実さ）という仕方で読み解くことを試みる。

こうして、虚構的自伝、捏造された系譜、家族の（不）道徳性という観点から、個別の作品を具体的に読み解くことで、彼の多様な問題意識とその根本的統一性が露わになる。レチフにおいて裏側から目撃されるもの、それは近代的な主体の創設ではないだろうか。

ワークショップ6 文科系総合講義棟204

文学集団の詩学

コーディネーター・パネリスト：熊谷謙介（神奈川大学）

パネリスト：倉方健作（九州大学）、福田裕大（近畿大学）、合田陽祐（山形大学）

19世紀後半の詩は、一方でボードレール、マラルメ、ランボーと固有名詞で語られがちであり、他方で政治や宗教などの言説に引き寄せて論じられる傾向にあった。しかし、作品は決して一人の天才によって作られるものではない。また他領域の言説より先に来るのは、同時代の文学的言説の中でどこに身を置くか、である。これは「文学の自律性」（ブルデュ）を再考する上でも重要であろう。私たちはこれを「文学集団」の観点から考えたい。大衆社会の成立期にあつて、詩人たちは集団を形成し、言葉を互いに流通させながら、文学の商品化の時代を生きていた。本ワークショップでは、19世紀後半の詩人たちを中心に、作品創造の場となる共同体について論じていく。

倉方は「高踏派」と括られてきたグループを再検討することから、文学史上の区分の自明性、研究対象としての「個人」と「集団」のあり方を問う。福田は1870年代の文芸サロン・文学的小集団のなかでみられた様々な創造実践に着目し、同時代の作品生産・受容のありかたを集団性の観点から再考する。熊谷は1890年代において師弟の問題が前景化したことを確認し、マラルメが理想とした「師弟のまじわり」に着目することで、世紀末の文芸共和国の在り方について考察する。合田はジャリの『フォストロール博士の言行録』をアンソロジーとして再読することを通し、1890年代の『メルキュール・ド・フランス』誌の共同体のあり方について問う。間テクスト性、ホモソーシャル、雑誌メディア、アンケート、 маниフェスト、朗読、集団創作といったキーワードで考えることで、19世紀後半のみならず、ポエムや20世紀の前衛芸術集団を考えるための視点を提供し、多くの聴衆に活発な議論を喚起できればと考えている。